

思春期女性プロジェクト～秘めた可能性を呼び覚ます～

JICA の支援を受けた取り組みによって、女性たちは自分の生き方を自分で選択し、伝統的に保守的なコミュニティにおいて男女平等の時代を築こうとしています。



シェルプールのジェンダーリソースサブセンター
写真: Geetha/OWSA

シェルプール村のジェンダーリソースセンターに足を踏み入れると少し変わった光景に直面します。中庭への壁はオープンになっており、塗装されていないでこぼこな壁には男女平等や女の子への教育、健康や衛生を呼びかけるポスターが貼られています。建物の上階が完成していないため、石綿の覆いによって移ろいやすい天候からの影響を受けないようにしています。

ママタ・サマジク・サンスタのチーフコーディネーターであるビーナ・ワリアさんは、「ここは女の子たちがありのままにいられる場所です。歌ったり踊ったり、生き方や希望、憧れを語り合える安全で自由な場所です。重労働や貧困、差別の中で生きている彼女たちがただの女の子でいられる場所なのです。」と言います。

ビーナさんのこの言葉は、彼女たちが持っている強みや能力を自ら認識することによって健康的な生活を送り、地域社会に多に貢献することにつながるという、「思春期女性自立支援プロジェクト」の基本的な考えを表しています。このプロジェクトは、地球市民 ACT かながわ (TPAK) と、インドの NGO ママタ・サマジク・サンスタの共同プロジェクトで、JICA の支援を受けて進められています。

Kushal Kishori Pariyojana (可能性を秘めた思春期女性プロジェクト) として現地で知られているこのプロジェクトは、2009 年からウッタラカンド州のデラドゥンにあるヴィカスナガル郡の 20 村で実施されています。

変化を起こすためには



ジェンダーリソースサブセンターで少女たちに向かって話す TPAK のプロジェクトマネージャーである竹内かおりさん(左) ヴィカスナガル郡バイラギワラ村
写真: Poorva Sagar/OWSA

ママタ・サマジク・サンスタはおよそ 20 年にわたって、社会的に保守的で経済的に恵まれないコミュニティに働きかけてきました。地域でもっとも貧しい女性たちはひどく抑圧され、法的にも社会的にも経済的にも非常に困難な状況の中で生活しています。若い女の子たちには、重労働の中で生きることに対するような気力もありません。彼女たちの多くは、経済的な理由や、家事労働、社会的な規範のため 5 年生になるまでに学校に登校しなくなります。

ビーナさんは「問題が広範囲で、それぞれがコミュニティに根ざしたものであるため、私たちだけでは継続的に影響を及ぼすことはできないということが解りました。」と言います。今ではこの共同プロジェクトは10～19歳の思春期女性を対象とし、彼女たちに知識や技術、自信を与えることで、彼女たちが自身の将来を作っていくこと、そして同時に家族やコミュニティにも変化を及ぼすことを目指しています。

TPAK プロジェクトマネージャーである竹内かおりさんは、「私たちが思春期女性に働きかけようとしたのは、成人女性を対象にしたプログラムはこれまで数多くありましたが、思春期世代は対象とされていなかったからです。」と言います。「もうひとつの重要な側面は、同じ境遇にある女性たちに学んだことを共有する Peer Educators (PE) となる女の子を選び、トレーニングすることで。女性をエンパワーするためには、思春期という早い段階で知識や創造性、リーダーシップを育てる必要があると、私たちは強く信じています。」

生涯にわたり役に立つ知恵

竹内さんとビーナさんは、社会の変化はいつも女性によって起こると信じています。「それゆえ、プロジェクトは健康や読み書き、家族の生活、仕事などあらゆる面での女性の立場を改善することを目的としているのです。」と竹内さんは話します。

研修や活動のハブとなるジェンダーリソースセンター(GRC)の存在は、このプログラムの鍵となる要素です。ママタ・サマジク・サンスタはプレムナガールで GRC を運営しており、定期的に泊り込みの研修プログラムを提供しています。

それぞれの村にはサブジェンダーリソースセンター(Sub-GRC)があります。サブセンターを村のコミュニティの所属とすることでコミュニティの当事者意識を高め、プロジェクトが終わった後でも、コミュニティが活動を継続することが期待されています。

サブセンターのいくつかはコミュニティによって提供された建物にあり、その他は村の Anganwadi センター（政府が提供する0～6歳の子供のための学習センターで、子供や母親のケアセンターとしても機能している）と同じ建物に入っています。また、サブセンターは GCR コーディネーターの家で運営されていることもあります。

各サブセンターは GCR コーディネーターが1人、PEが2人、インストラクターが1人、20～30人の女性で構成されています。加えて5つの村ごとに配置される4人のセクターコーディネーターがいます。

ジェンダーリソースセンター(GRC)の概要

GRCは、若いPEのリーダーシップを育て、メンバーに生計向上、健康・衛生、ライフスキル研修に関する研修を提供することを目的として設置されました。

GRCの活動を強化するため、各村にサブセンターが設置され、多くの場合ASHA(村の保健ボランティア)やANM(准看護助産師)の経験者がコーディネーターとしてセンターを管理しています。サブセンターのコーディネーターは、5村をまとめて担当するセクター・コーディネーターによってサポートされています。

各サブセンターの思春期女性メンバーは20～30人で、その中からPEが2人選出されます。PEは研修に参加し、学んだ知識を広めます。

結果を共有するため、スタッフ、コーディネーター、PE、インストラクターが集まって3ヶ月に1度の振り返りミーティングが行われ、必要に応じて軌道修正を行います。



ヴィカースナガル郡シーサンバラのサブセンターでインストラクター（中央）から熱心に裁縫を学ぶ思春期女性
写真: Attribika Hazarika / OWSA

デラドゥンのプレムナガールにあるメインのGRCで、PEたちは様々なライフスキル研修を受け、身につけたスキルを村の女性たちに広める責任があります。現在40人のPEと、1200人の思春期女性がこのプログラムに登録しています。

メンバーたちは週に6日、午後の2時間の集まりに参加し、裁縫やショール・カーペット作りなどの技術を身につけます。それに加えて、美容研修も選択することができます。これらの技術は彼女たちに能力や自信を持たせ、彼女たちが大人になった時に経済的に自立できる道を歩むことにつながります。

シェルプール村のサブセンターでインストラクターとして活動している23歳のプーナム・パールさんはデラドゥンのGCRで訓練を受け、現在は美容師として働いています。「現在、私は自分の村で女性たちに教えています。美容サービスには大きな需要があると感じており、私は今日の私のように彼女たちが経済的に自立するのを手助けできるのです。」と彼女は言います。

同じように、23歳のセクターコーディネーターであるニーラムさんは「1月から村々を回って参加者を増やすために、このプロジェクトの恩恵を女性たちに説明してきました。」と自分の活動について語ってくれました。

[\[Video: Sector Co-ordinator, Neelam on her role and aspirations in Kushal Kishori Pariyojna\]](#)

「活動の初めの頃は、娘をサブセンターに行かせるように親を説得するのに苦労しましたが、このプログラムの恩恵や重要性について粘り強く親たちに訴え続け、習得できる技術が有益であるとわかってくれるようになると活動がスムーズになりました。」とセクターコーディネーターたちは話します。

健康的な生活が健康的な考え方を生む

この地域の女性は健康や衛生に不安を抱えており、生計を立てるためのスキル向上の他に、保健衛生は活動のもう一つの重点分野です。清潔を習慣付け、簡単な手順を実践することで感染症や病気を減らすことができるため、思春期女性たちは栄養とバランスの取れた食事、手洗い、歯磨きといった実践法を学び、定期的に健康診断を受けています。多くの女性は大変貧しく、成長期に必要な鉄分量が含まれる健康的な食事を取ることができないと考えられるため、週に一回、鉄分の錠剤やシロップが無料で配布されています。

このプロジェクトによって政府の医師との繋がりが深まりました。時にはTPAKのボランティアや海外からの専門家がやってきて、研修を行ったり健康診断を実施したり、無料で健康相談を行ったりしています。

PEは自分の家族や村人へ健康や衛生の知識を伝える重要な役割を担っています。彼女たちは自分の家で自分が学んだことを実践し、村の友人や親戚が同じようにできるように自分の経験を伝えます。コストがかからず、かつ実践的な知識は、すぐに村人に取り入れられます。

PEは家庭で使用されている食塩のチェックに関するトレーニングを受けます。通常の食事では、体に必要なヨウ素を十分に摂取することができないので、PEはヨウ素が添加されたヨード塩の使用を促しています。ヨウ素が不足すると、身体的、精神的な成長に悪影響を及ぼします。また、疲労や虚弱の症状が出る、甲状腺腫や甲状腺の機能低下を引き起こしたりします。

啓蒙に留まるのではなく

女性の地位向上プログラムの多くは男性の役割を認識せず、活用してきませんでした。実際、男性が男女平等の議論に関わらないと、女性の権利を獲得することは難しいでしょう。この事実を考慮して、このプログラムでは男性の認知やサポートを得ることを重要視しています。各村で男性にコーディネーターとして協力してもらい、各村でミーティングを開催したり娘をプログラムに参加させるように親を説得したりしてもらっています。

[\[Video: Bhawar Bhatt of the male support group speaks about his role\]](#)

ビーナさんは、「男性も女性も平等にチャンスが与えられ、情報や権利へアクセスできるようになる必要があるということを男性に理解してもらうように努力しています。」と言います。そのため、センターには「ジェンダー・リソース・センター」という名前が付けられたのだ、と説明してくれました。

「コミュニティー全体の幸福を高めることが私たちにとって重要です。最初は女性に働きかけますが、社会の繁栄のためには女性も男性も等しくジェンダーに関して敏感である必要があります。」と話します。



シェルプール村のサブセンターで、自分たちで作ったショールを掲げるプーナムとボビー
写真: Attriba Hazarika/ OWSA

バイラギワラ村のサブセンターで、自分で縫ったかばんを誇らしげに持つ若い女性たち
写真: Poorva Sagar/ OWSA

プログラムはまだ始まったばかりにも関わらず、その影響は広く見られます。メンバーの何人かは、政府の保健システムの下で基本的な保育や助産ケアを提供する、ASHA（村の保健ボランティア）や ANM（准看護助産師）として州や県によって雇われています。GRC で職業訓練インストラクターとして雇われたメンバーもいます。その他は、村で美容院や手工芸品店、仕立て屋など小さなビジネスを始める計画をしているメンバーがいます。

[\[Video: Beena Walia, Co-ordinator, Mamta Samajik Sanstha speaks about the initiative\]](#)

雇用機会や技術の習得といった、目に見える効果が認められる一方で、もっと重要なのはプロジェクトが引き起こす内的な変化かもしれません。自分の能力の認知や訓練の機会によって、彼女たちはかけがえのない自我の意識を得ています。自信を持つことで彼女たちは成長し、強く自由な女性、リーダーになり、家族や最終的にはコミュニティーまで影響を与えることとなるでしょう。彼女たちがありのままにいられる場所を与えられていれば、自然とその時が来るでしょう。



ウッタラカンド州チャモリ県で実施中の
TPAK, MAMTA, JICA の共同プロジェクト
について

[http://southasia.oneworld.net/fromthegrassro
ts/young-women-ready-for-social-change](http://southasia.oneworld.net/fromthegrassroots/young-women-ready-for-social-change)